

1) ナツツバキ=夏椿

ナツツバキはツバキ科の落葉高木で、東北地方以西の本州、四国、九州、及び朝鮮半島などに分布する。庭木としてもまた公園などにも多く植えられており、初夏の頃から、お盆の頃まで白い大きなツバキに似た5弁の花を開く。花弁には皺が多く、裏面には絹毛が多く生えている。花が終わりに近づくと萼が中央に集まってきて、花弁を押し出すように散らせる。果実は卵形で完熟すると5裂する。樹皮はつるつるしており淡赤色を帯びた茶色で『百日紅』にも似ている。このため別名として『サルナメ』などというところもある。またシャラとか、シャラノキと呼ばれることも多く、これはナツツバキをインド産の『娑羅双樹』(シャラソウジュ)と間違えたことに由来する。本来の娑羅双樹はフタバガキ科で本種とは異なり、日本には自生していない。このため寺院などではこのナツツバキを娑羅双樹の代りに植えるところも多い。特に比叡山の浄土院など天台宗の寺院では、仏と縁りの深い聖樹として植えられている。仏教の釈迦入滅時の伝説によると、釈迦はクシナガラというところで80歳の時に食中毒にあい、2本の娑羅の木にはさまれるように横たわって、その地で生涯を閉じたと伝えられている。このため天台宗ではこの木を娑羅双樹として大切に扱うようになったのである。また『平家物語』でも最初の部分で

祇園精舎(ギョウヅウヤ)の鐘の声、諸行無常(ショギョウムジョウ)の響きあり、
娑羅双樹の花の色、盛者必衰(ジョウシヤヒツスイ)の理(コトワリ)を表わす
奢(オゴ)れる人も久からず、唯(タダ)春の世の夢の如し

たけき者も遂(ツイ)には滅びぬ偏(ヒトエ)に風の前の塵に同じ

と書き出して、人間のあるべき姿、そして「無常観」を綿々と語り始めるのである。平家物語は単なる戦記ものや編年体の歴史ものとは異なり、人の情や大自然への目配りが常に働いており、著者の心の姿が自然と伝わってくる。おそらく仏門に帰依した人か公家の出であっても世の中の潮流から外れ、あまり表舞台には出ることのなかった人物なのだろう。かの『徒然草』の中で兼好法師は平家物語の著者について、13世紀の初頭、延暦寺の坐主、慈鎮和尚(ジチンオショウ=慈円)のもとにいた学才ある公家出身の遁世者(トンセイシャ)、信濃前司行長(シナノノゼンジュキナガ)と、東国出身の盲人で芸達者な生仏(ショウブツ)の二人が協力しあって作ったものだと述べている(徒然草第226段)。その内容は平忠盛に始まって、清盛、重盛、維盛(コレモリ)、そして六代(ロクダイ)の「斬られ」によって終わる平家一門の5世代70年間に及ぶ興亡の物語である。しかし物語の主力は忠盛、清盛が出世街道をひた走ってゆく場面より、むしろ頂点に達した清盛が仁安2年(1167年)に50才にして太政大臣となり、寿永4年(1185年)に平家一門が壇之浦で滅亡するまでの18年間にその大半が割かれている。これは言ってみれば「亡びの美学」とでもいおうか、桜の「散り際の美学」に通じるものがある。芭蕉の言葉を借りていえば

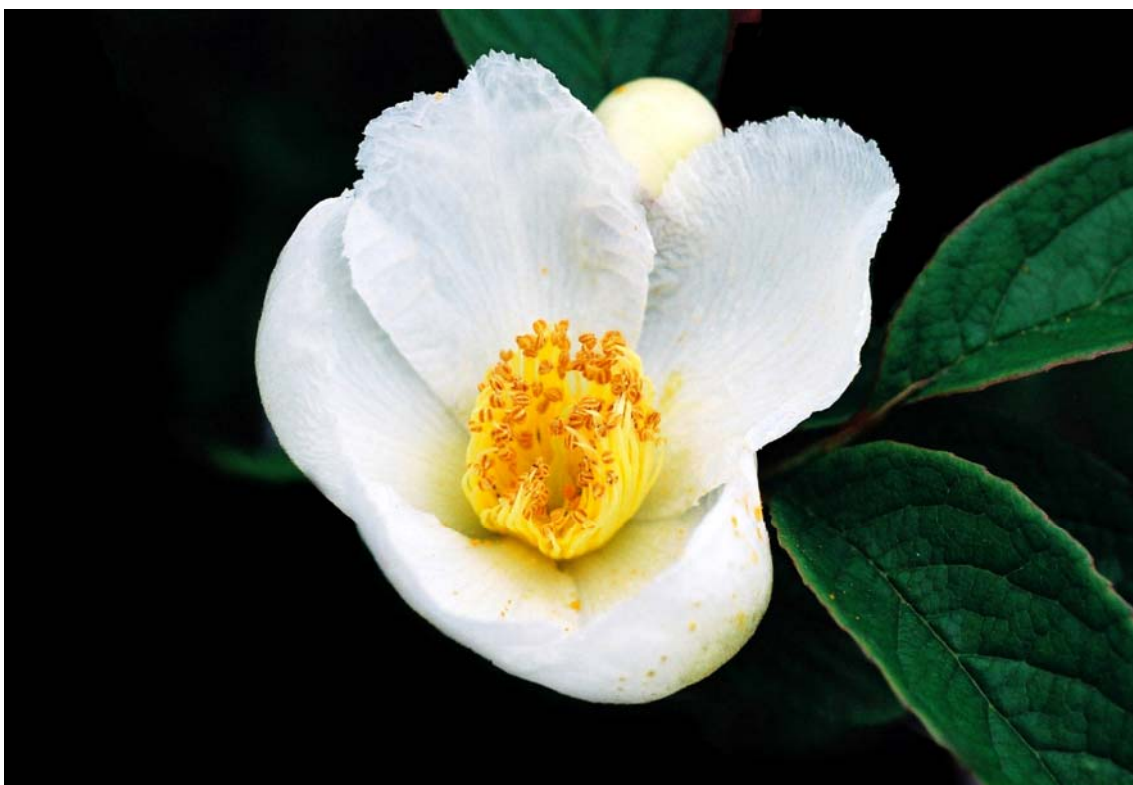
夏草や 兵供が ゆめの跡

であり、若山牧水の歌でいえば、

かたはらに秋草の花語るらく 滅びしものは懐かしきかな
という心に通じている。平安末期にすでに我々の祖先は「亡びの美学」を文学作品としていたわけで、これは桜の項で検討した「散り際の美学」と同じ時代でもあった。日本人の哲学や思想の原点は案外、亡びの美学であり、散り際の美学であり、その根幹をなすものは、仏経の伝来以来、やがて日本人の心を支配するようになっていった日本人独自の『無常観』であったと見ることもできようか。

さてこの『平家物語』はやがて琵琶法師によって『語物』(カタリモノ)として当時は文字の読めなかった人々に対して、琵琶という楽器の演奏をまじえながら語られるようになる。これは庶民の間で大いに歓迎されて、中世の一時代を画する文芸としての発展を見るようになった。当初は『平家物語』に限らず『保元物語』(ホウゲンモノガタリ)や『平治物語』なども語られたが、『平家』以外のものは次第に廃れてしまった。これは『平家物語』のプロットそのものが、当時の日本人に受け入れられる要件を満たしていたからであろう。「平家なり太平記には月も見ず」といわれたように、『平家物語』の道筋には人間の情感や心の起伏、はたまた歴史の必然性や偶然性を文学的な表現として、周囲の風景までも取り込みながら、語ってゆく余裕があった。そこには日本人の情念の源流そのものが脈脈と流れ続けているのである。巻頭の『祇園精舎』とは、アナータピンダダという長者が寄進した修業の場所のことで、彼は釈迦の支持者でガンジス河の中流域コーサラ国の人間であった。釈迦はここで人の悩みを解決する方法は、各人が自己の内面から行なう自己変革でなければならないと教え、そのためには苦悩の淵源を追求し、それを取り除くことだと解いたのである。この教えはやがて中国や日本を初めとして、東洋の諸国にさまざまな形で影響を及ぼし、東洋哲学の根本理念にもなった。

夏椿には政治や歴史の流れから外れて、黙々と生きる何か悟りきった貫禄のようなものが感じられ、茶庭にはなくてはならない木の一つとなっている。また材としてのナツツバキは美しい茶褐色で、材質は堅く器具などの柄や箱もの、玩具、杖、漆物の木地、櫛、彫刻材、また和風建築では床柱などにもよく用いられている。繁殖は実生もしくは取り木によるが、挿し木も不可能ではない。しかし活着率は良くないので山取りをすることが多い。このため苗木はなかなかお目にかかれない。しかし挿し木2年程度のものなら500~800円ぐらいで売られていることもある。陽当たりのよい乾燥気味の水捌けが良いところを好み、枝はあまり横には張らずに上へ上へと伸びる傾向にある。このため比較的狭いところでも植えておくことができる。また盆栽などにしておくと鉢植えでも結構花が咲く。千代田区の市ヶ谷にはこの木の並樹があり、今後ますます人気が出そうな花木である。



ナツツバキはしばしば「娑羅双樹」と間違われてきた。情報の乏しかった時代、ナツツバキこそ娑羅双樹だと思われてきたのである。このため今でもシャラとも呼ばれている。



ナツツバキはまさにツバキと同じ花を咲かせるが、こちらの方は落葉樹である。

[目次に戻る](#)